

「ひとりの思いを大切に」 ～主となる事業所の役割と専門相談員との連携～

特定非営利活動法人ゴウディングコミュニティ
多機能型事業所ごうでいんぐ原田通所生活介護
○三輪光司 後藤眞由美 萩原寿子 海老澤政昭

要旨

Aさんは、小学6年生の頃からパニックが激しくなり、自宅でものを壊すことが見られるようになった。中学以降、唾吐きや他者への暴行等々が激しくなり、この頃、病院より自閉症の診断を受けた。高等部へはB学園より通学をした。卒業後もパニックは減らず、むしろ激しくなってきたため、投薬の適性を確認するために3か月間入院加療を実施した。

C事業所での他者への暴行により、利用継続が困難となり、現在のD事業所を利用することとなった。このD事業所において、本人のニーズの裏に隠れた真のニーズを探りつつ、専門相談員及び他事業所を巻き込んだ連携を進めることの中で、主たる事業所及び専門相談員の果たす役割についてまとめたい。

1 目的

障害者へのサービス支給決定プロセスの見直しが平成24年4月に実施され、徐々に計画相談支援が拡充してくる中で、本人の求めるニーズとその解決に向けた取り組みの計画立案及び実行については、まだまだ手探りの状態が続いていたと思われる。明確な本人のニーズである場合とそうでない場合が当然あり、見かけのニーズの裏に隠された真のニーズを模索する必要性、また、「ひとりの思い」をいかに大切に、関係機関等の連携によって実現していくのが重要であると考えていた。この実現のためには、比較的多く利用される事業所が主となり、個別支援計画における本人のニーズに基づく計画を立案しつつ、真のニーズに迫りながら、本人の生きづらさの解決に結びつけるために専門相談員との連携を模索していくことが必要であり、その連携を進めることが、今以上に、本人の“生きづらさ”の解消に結びつくに違いないと考え、結果、「ひとりの思い」の大切さ及びそれぞれの果たす役割についても明確にしたいと考えた。

2 経過

1 本人の隠された真のニーズとは何か

D事業所を利用するようになって、しばらくの間は平穏な日々を過ごしていた。本人は「ショートに行きたい」と常に言う。これが本人の、今、一番求めていることである。ショート（短期入所）利用では、3か所の事業所を利用している。これらの事業所においても大きなトラブルもなく過ごせている。本人がなぜ“ショートへ行きたい”と願うのか、本人に尋ねてみると“家にいたくない”とのことだった。“なぜ家にいたくないのか”に対しては“わからない。”と。私たちは、本人のニーズ“ショートへ行きたい”の裏には、“自宅にいたくない理由がある”、その理由は何なのか、その解決をすることこそが“本人の真のニーズ”と受け止め、まずは、本人・事業所・家族との連携を強めることにした。この“自宅にいたくない理由”に対して、父親は、部屋に当時の残骸（壁に開いた穴等）があり、それを見ることによって、いろいろ思い出してしまうのかもしれない、と言っている。多分、過去の辛いことや嫌だったこと等が入り混じって、混沌とした、漠然とした“嫌”につながっていることは想像できる。その原因となることを探ることが、

今、求められることではなく、漠然としたことを漠然として捉える勇気も必要ではないかと思ひ、まず、家族との連携を進めることとする。

2 家族との連携：連携を通して家族の空気を変える

D 事業所を利用してから約1か月後、自宅にて激しく暴れる。通所させることに不安があるので、自宅にて“休ませる”と父親から連絡がある。家庭訪問を行い事業所にて本人から直接状況を聞くこととし、本人納得の上、事業所に通所する。本人より状況を聴取、家族からも時系列で聴取し、突合せを行う。

両親が発することばが本人に与える影響や身体が大きくなったことにより対処が困難になりつつあること等々、いくつかの課題が整理された。

今後の対応策として、

まず、本人とよく話し合い、筋道を立て整理していくことを確認した。(原因、根拠、対処方法等々) 両親には“事業所において自宅同様のことが起こることを心配・不安になることはないこと”を伝え、安定した気持ちで本人に接してもらうように働きかけた。(⇒家族内の空気を変える)

最後に、家族・事業所・病院が連携して、本人の将来を考えていくことを確認した。

上記を進めるために、専門相談員に今後の取り組み等について相談することにした。

3 パニックの増大

事業所において大きなパニックが起こる。送迎車輦の中での支援員とのやり取りの中で、支援員がきつい口調で諭したところ、唾吐き、ものに当たる、支援員に殴りかかろうとする等々が大きな声と同時に起こる。このパニックを境に、緊張が切れたのか、事業所及び自宅内でのパニックが頻繁になる。家族内においても、今まで見られなかった器物破壊や暴行が散歩の際に起こった。これらのことについて本人との振り返り作業及び両親

との面接を実施した。また、自宅での様子を一週間記録してもらい、週末に事業所と家庭での様子を突合せのための面接を行うこととした。

面接を継続していく中で、両親はほんの些細なことでも支援員に尋ねてくるが増えていった。このことは、普段、何げなく過ごしている中で気付いていない部分に焦点を充てることとなる。(家庭での記録及び週末の面接は7か月間ほど続くこととなる)

4 家族内での対応の限界：ケア会議の設定へ

パニックについては、その都度、本人と振り返りを実施しつつ、“仲間たちの中で本人の願いを確認しつつ実現する(Aさんの不安を少なくする)話し合い”を行うことは、事業所の仲間たち、支援員、家族、かかわる人たちみんなが思いを一つにすることにつながり、その思いが少しずつ伝わっていくと確信し、具体的な理解ではなく、“共に感じる”または“感じ合う”ことを通して、Aさんの変化を期待することとした。そんな中、家族においてはAさんの暴力への対応が極限に至り、ケア会議の設定を考慮することとなった。専門相談員との面接を経て、緊急一時対応として、急きよ、ショートステイを行うこととなる。ただし、緊急一時終了以降の対応についても協議する必要があり、主たる事業所・ショートステイ(短期入所)事業所・行政・両親とで協議することとなる。父親は1~2週間程度のショートステイを希望。本人もショートステイを希望。(この時点では、本人にとってまだ家族内での関係にはしこりが認められる)

5 緊急一時保護実施

緊急一時対応としてのショートステイを経て、表現はおかしいがショートロングを行うこととなる。期間は当面3ヶ月。主たる事業所・ショート先の2事業所・行政・専門相談員・両親のメンバーが一カ月に一度集まり、月の情報交換を実施し、今後の展開につ

いて協議することとなる。この3か月間は、家族との接触を無くすようにする。(以前、入院加療した際は両親が毎日訪問していた)これは、本人の両親に対する真の思いを確認するために必要な自分自身の振り返りであり、同時に、両親にとっても自分たちを見つめ直す期間でもあった。振り返りのための計画等すべての全体計画は主たる事業所が作成し、両親としばらく会えないことについては家族会議を開催してもらい、双方が納得して始めるように配慮した。両親は“親の思い”を“以前のようになろうよ”と素直に伝えた。本人はしばらく沈黙し、“面会は?”と質問。これに対しては、状況を見ながらすぐに面会するのではなく、“手紙のやりとりをしていく”ことを挟むこととした。本人にとっての快適な場所とは家族と離れての場所ではなく、家庭こそが真の安住の地であり、時に、逃げ場としての別の場所が存在することに気づき、言い換えれば、“本人の居場所と本人以外の人たちの活動場所を行き来する”ことを通して、“人とかかわる楽しさ”に触れていく機会を見出していくことが支援員たちの課題となった。

4 成果と課題

3か月間のロングショート終了間際、Aさんは一時帰宅をした。期間中に正月を挟んだため、しきりに“お正月は?”“家に帰る?”とのことばが増えていたためだ。(このことばはとてもうれしいことばであった;本人、家族、関係者にとって“本人が家庭を求めている”ことの再確認)この一時帰宅には、さまざまな期待があった。家族との接触がしばらく無かった後の再開、そして、自宅での生活。本人にとっても、両親にとっても、期待と不安が入り混じった正月を迎えることとなった。

正月はとても穏やかに過ごすことができ、一時帰宅を終え、ロングショートに戻った。2週間ほどロングショートを行い、今度は一時

帰宅ではない、帰宅となった。(この時点では少しずつ本人と家族とがかもしだす空気に変化が見られてくる)

今回のケースで、主たる事業所が作成する個別支援計画と専門相談員が作成するサービス等利用計画の突合せの重要性、また、一人の思い・願いをかかわる関係者が共有し、必要な場合ケア会議の開催及び全体計画の作成を行うことが必要であることが立証できたと思う。また、全体的な計画等を主たる事業所が担い、各事業所間のコーディネート専門相談員が担っていく役割分担も明確になったと思っている。専門相談員は通院にも付き添い、病院側とのコンタクトも取り、福祉と医療の連携に力を注いだ。全体計画を推進していくための具体的行動計画は専門相談員が担ったのである。

Aさんは、帰宅後、1年間かけて、D事業所に完全復帰することができた。週2日程度の通所から始め、1年後には週5日の通所が可能となっている。この間、不安定が引き金となりパニックになることがなくなったわけではない。ただ、以前に比して、自ら、気持ちを落ち着かせようとする行動や支援員への声かけ等(未然に不安定を回避する本人の試み)が確実に増えている。最近では、他の仲間たちと笑顔で談笑する場面も見られる。両親に対しても、漠然とした嫌悪感から、「お母さん、好き」とのことばかけが見られたりもする。また、両親も、今までの経緯の中で、自分自身の見直しを通して、新たな気付きもあったようだ。本人を取り囲む環境そのものが自ら変わることで、本人の周りの空気の流れが大きく変わり、今まで漠然と、悶々としていた空気そのものも少しずつ晴れたのではないかと感じている。